

細川文書  
81

中外新聞

第十六號

自十六  
至二十  
慶應四年四月三日  
潤四月三日至

定價一匁



中外新聞第十六號

慶應四年四月廿三日

四月十五日 上様出道中に滯おく水戸表へは著弘文亭へ私爲入の趣彼地より来る

東久世殿并肥前侯横濱へ来着の由同處より報告あり徴士寺島陶藏并關齋右衛門等も来りし由

十六日頃結城小山の邊に戦争有りし由にて種々の報告あり十八日十九日江戸在留の官軍追々野州へ發向す其詳ある事を未相分らず

○夫婦同寢多少の限ある話

唐通居士 譯

原本西洋情史の一章を抄出す

一夫よりて數婦を娶ふは天理にも背き家道にも害有りとして西洋よりて古よりこれを戒むを善き教とせりされど動もすれを此戒を犯す者多りりければ古來賢人これを憂へ種々の教を立て竟も夫婦同寢の數をさへ定むるに至れり○モゼスと云ふ人を古の大賢者と仰ぐる程の人おれ其其教を時の習むるに従ひて立られし故にや強ち妻を置く事を禁ぜられず出埃及記の廿二章よりとて妻を置く

其本妻の衣食及び同寢の數を之を減す可からずと説くれより其他モゼスの掟の中は學問の爲おれを三十日までを妻より遠ざかるも苦しうらず職業の爲おれを七日を限とす壯年よりて職業は差支おれを毎夜同寢するも妨無し假令差支有るも七日の間は兩度を欠く可らず但し駱駝牽え三十日の間は一度船頭を六ヶ月は一度を少きの限とす又妻若し夫の同寢をいふまじむ其夫七日目毎に妻の資財を取上げ資財盡るに至らむ離縁狀を遣はすべしと云へり○其後ラビン人少く此掟を改め學問の爲おれを二三年の間は妻より遠ざかるも苦しうらず然れども可成丈七日の間は

兩度づゝも同寢する松は心懸く可いと云つり。○希臘國の  
ソロンと云人も亦古の大賢あり。ガアテ子の法令を定め  
し時は毎月必ず本妻と同寢す可いと書載せしり。○回教  
の國は後世も猶此風俗残り妻と同寢するを夫の勤と  
し妻より之を催促する事宛も債をなさるゝ異ならず是れ  
其國は七日毎一度づゝ同寢を欠く可らず若し之を欠く  
時も妻これを裁判所へ訴へ離縁狀を求むるの權あるべし  
と云ふ掟あるゝ依てあるべし。○以上諸賢人の教を小異同  
ありと雖も皆夫の本妻を疎みて同寢の數の足らざるを戒  
むるのみよていま嘗て其數の過るを戒めざりし其後

數百年を経て初めて其一例を得しと殊に驚く可き事とや  
いもん所を今の西班牙國の地は中古の世アラガンと云ひ  
し國あり其國の何と云ひし女王在世の時あり。ガカタ  
ロニと云ふ所の民の妻其夫の同寢の多きを訴へ祭日と  
雖も十度より少き事あらざと歎きけむ女王も之を憐み  
玉ひ速に其夫を召して痛く呵責し今より後一日六度過  
く可らずと戒め玉ひ且後世の掟あれむとて此事を普く國  
中は布告し玉ひけり後來好事の輩此等の話を傳へてソロ  
ンが一月一度と定めしを少きの限としカタロニの民  
婦が一日は六度を請合ひしを多きの限とする事となりぬ



尚記事長ければ他日續きて譯出す可

○暮春書感

作者不詳

三百年來霸氣雄豈知時運轉西東如今命脈君看取只在西郎  
方寸中

失題

何事諸公爭挂冠鷦鷯無復一枝安朝々濺盡孤臣淚滿地落花  
風雨寒

○京師出觸書二通

紀伊中納言

有馬中務大輔  
奥平大膳大夫

小笠原豐千代丸

溝口誠之進

伊達伊豫守

大總督不日著ふ付入城も可相成付てを關東に取締尚奥  
羽等速ふ平定ふ至りぬ松指揮可有之ぬ付早く出發東向  
ふ仰付し事

但著府の上直招大總督へ可届出ぬ滞陣中も不及申途中  
等摠て嚴肅に致し不覺悟無之松可心得事

今般已ぬは親征 出出輦に遊海軍 是覽之上關東時機  
ふ依り直極輦輿を東山道へ可ぬ爲向 思召ふ右に先般

處々おいて賊臣 官軍を抗し盡く撃破し及ぶと雖も未だ  
餘黨彼是屯在致居い哉よも相聞えいふ付萬民艱苦の程を  
歎思召い條大總督指揮の上も速く遂忠戰四海平定奉安  
宸襟 此沙汰之事

三月

○京都に觸書二通の寫

銅錢の依當時各國相場は斟酌の上自今一文を以て銀六文  
は通用を 仰付い事

右を是まで其位當を得ざるを以て動もすれども奸商共異邦  
へ輸出いこい依も有之依之速く海内へ布告を 仰付い

事

三月

太政官

○

横濱ドルの相場五七日來又少く上りたる方あり一ドル  
は付四十四匁八分五厘より四十五匁

錢相場日々下落近日に至て最甚く今日天保錢金一兩は付  
十貫九百三十二文 文久錢は十四貫二百文

○髮切の怪談

新聞社友元來奇怪の説を信せず然れども左の奇事を目撃

せりと云ふ人の有るよ任せて附録一以て博物君子の定論  
を俟つ

四月廿日夜小川町歩兵屯所にて一人髪を切られざる者有  
り夜半の頃寢所より起きて厠<sup>トイ</sup>に往きし何物とも知らず  
真黒ある物突然と來りて頭は突當るよと覺ゆるや否や卒  
倒して人事を知らず此物音は驚きて人々集り介抱せし  
む頃て正体は成さう然るよ髪<sup>カミ</sup>も落ちて二三間も離れざる  
地上に在り其真黒ある物も猫の如くよして黒き事恰も天  
鷲<sup>テンリウ</sup>絨の如くありとぞ

中外新聞 第十七號

定價一畝



中外新聞第十七號

慶應四年四月廿五日

總督よりの旨達書寫

軍艦之倂度く相達し通一事不舉いへとも恭順の道も悉く瓦解し可及時機よて 此處置振一結局の 奏聞も不為爲調次第よい勿論兵艦銃器も必兵力を以て 天朝へ不相迫實効を表し譯し處軍艦奉行榎本和泉主家を思ふ至情感心の事よい間願意相貫き此れ盡力可成降い就て直松四艦も其儘を下し付其餘四艦急速 朝廷へ可差上松大總督宮内沙汰い條此段相達い事

四月

東海道先鋒 總督 印

副將 印

田安中納言殿

○

石川河内守

佐久間鏑五郎

右之者當分市中取締之儀付之間嚴重に忠勵可有之旨  
大總督宮内沙汰に條相違ひ事

四月

東海道鎮撫總督府

田安中納言殿

○論重板

唐通居士

夫れ智識を闢き風俗を勵ますの道を學問を盛ますより  
善きを無し而して再ひ其源を推せむ全く新書籍の著述に  
在り是を以て世界中文明の邦にても極めて著述の事を  
重んず之を鼓舞せんが爲に主として其重板を禁するあり  
蓋し重板の禁あれど新書出賣の利悉く著者は歸すべし而  
して官より著者を褒賞する所以并に著者の益多く著述に  
て國恩は報ずる所以皆此中に存するあり

居士嘗て西籍を譯して褒功院説を著せり近日校正し  
て西洋雜誌卷四に載すべし

我邦は於ても舊來重板の禁甚と嚴ふり、近頃其法破れ  
しと見えて重板の事あるより第十二號は報告あり予おも  
へらく此事果して實あらむ世道は關する事鮮うら乎今よ  
り以後新著の利盡く姦商は歸し著述者の損失殊と甚し  
業を破り産を失ふも勿論假令世を憂へ國を思ふの志深き  
者有りとも微力よりして損失の補をふす事能くする時と著  
述を企つる事叶ふざるに至らん是れ實は智識を闢き風俗  
を勵ますの本意は非あり方今百度一新一夫も其所を  
得ざる者無きの聖世は在て只此一事頗る闕典に屬する  
は似たり最以て惜む可く歎す可き事あれ我公私の爲は

一應これを論辨せざるを得ず

戊辰四月

東久世前少將此度中將に昇進せらる

四月廿日神奈川奉行水野若狹守同並依田伊勢守 朝命と  
君命とを奉り段々應接濟の上横濱港を東久世殿と肥前侍  
從とに引渡し翌廿一日歸府す組頭調役亦これに従ひて江  
戸に歸る定役以下小吏も其儘同所にて召仕をる、筈は決  
せり但し其内勤を辞して江戸に來りし者も有り

○四月十八日出板横濱新聞の譯

兵庫より一隊の兵士乗船して仙臺に向て出張せり事の模様は依りては江戸へも海路より官軍来る可いと云ふ  
會津も國內の士民は布告して曰此度の勅諭も全く天子の真意より出さるよても無く薩長の意に成れる者あり  
若し實は罪有りて御門の譴責を蒙るからと御前より於て切腹し其罪を謝す可いと雖も實は然らざる事明白なり  
故に死を以て國は殉し飽くまで敵と戦ふ可いと  
日本は於て大名の此の如き事を家來は觸れ示す事も屢なり是れ人心を激動固結せしむるの策なり曾て先將軍の

長州を伐ちし時長州よても右の如き趣を布告して王命は抗しさり

會津の國論も一定せしや否や之を知る事能くす若し會津の國論分裂して因循をふすからと南方諸侯大に力を得る  
あるべし

英國の軍船追々横濱を發して五月十五日即ち日本四月廿三日までは大坂港へ集る可いと布告せられし依て軍船ロド子イも今日オセアソンを明日此地を發しサラミスも續きてパークス君を載せて此港を發すべし

オセアソンも鐵張の蒸氣フリゲートにして四千トン

積一千馬力より大砲廿四位の大軍船あり

但し此度の命令も平穩の事あり是れ英國使節として上京  
し朝廷へ拜禮を行ふが為なるべし

オルハンと名くる蒸氣船一艘京都へ賣れしり價洋銀五萬  
ドル此内一萬五千ドルを正金其餘を銅にて拂濟ししり

成澤甚平 譯

越後よりの書狀は外國人新泻より會津に往きし趣を越  
ししり傳習の爲なるや外の用事なるや未詳

中外新聞追々盛んに行われしに付尙又職人を増し摺立製本  
相急がせし間來る閏四月より大抵一ヶ月は十冊ツゝ出來  
可致いさといへも朔日は一冊出來いへも四日七日十日と大  
九四日目の跡の本出來いさす可くは但し時より紙數延  
びし節を一兩日おくれし候も可有之し事

何よりらす跡しき新聞或を譯文を送り呉られし人へを製  
本を呈し尙又相當の謝儀差出し可し事

新聞中へ植込呉し松賴込み有之しへも一行は付金壹朱の  
出銀にて書き加へ可し事

但し其事柄の取捨を撰者の意に任せ可しし間此段兼



ては斷り置けり事

中外新聞遠國へ差送りけり爲第三板も小本にて合卷に致し  
賣出に事

中外新聞は減る異聞を集め社中にて外編を撰み近日發  
兌可致し事

右の外中外新聞別板無之に萬一偽板等有之にても慥なる  
證據を以ては知らせ可き下は厚く謝儀差出可し事

四月

中外新聞

第十八號

定價一仙

中外新聞第十八號

慶應四年四月廿七日

横濱在留外國人の書狀抄譯

新潟より報告有り北方諸藩の様子を聊々聞く事を得たり  
即ち左の如し

北方諸侯も 勅使の通行を妨げずと雖も南方の兵會津領  
地に入る事を許さず

溝口侯の兵五百人許京都へ發向す北兵を溝口侯へ逼りて  
何故に南黨に屬するや若し北黨の先鋒を加えらざるに於  
ては城地を奪ひ取る可き由手強き掛合ありと云ふ溝口より

り莫大の償金を出して和を乞ひとる由  
北方の兵を越後の高田に到り是より信州に趣く可き由の  
知らせ有り

吾等の思ふ所よて北方諸侯の勢益強大とあり遂に進て  
京洛の地を争ふに至るべし

○東山道總督府より諸藩へ此達の寫

大政は一新の折柄未だ政事向不行届を幸として無頼  
の惡徒共愚民を欺き徒黨を結び恐多くも官軍の内命或  
と薩長より付られ杯を偽り唱へ無辜の富家へ押入り

強談難問を中掛加之放火いよいよ日々亂妨相募り生民全く  
塗炭に陥りい段總督府においても深くは憂慮を爲遊一日も  
難捨置依之信州一國の賊徒鎮撫向當國列藩へ仰付い  
間各藩中合夫々持場を定め人數差出し置賊徒の亂妨を防  
ぎ惡徒を召捕諸藩脱走人或も無宿者に至て速に其藩に  
於て死刑に處す可くい尤百姓と雖も徒黨は頭立に向  
て平日の行狀正邪を糾し夫々可致所置い元來無頼の惡徒  
共徒黨を結び蜂起いよいよ倭いへて大義條理を以て鎮  
定し倭一朝一夕は不可行者い間勅命の旨に達し兵  
威を以て鎮撫可仕い但し年貢諸運上總て御收納向の倭を

近くは確定の上は沙汰可有之間それ迄の所只管鎮撫民  
政の心を用ひ萬民其業を安んじ精進可致盡力旨更に  
仰出されし間此段相違ひ也

辰四月

東山道總督府執事

○江戸市中改革仕方案

神田孝平 述

江戸を元來日本國中諸大名輻湊の地なり一所時勢一變  
今を復昔の如くあらず且遠くらざる内は外國人も居留す

る事は成る可けれも後年の盛衰を姑く差置き眼前此儘  
ても立ち行き難き姿あり然れども先づ急な改革の良法を行  
はざる可らず故其改革の趣意を第一江戸中の智慧と力と  
を集むるを肝要とすこれを集むるの法を總代會議の法を  
設くるに在り今試み其法を論せし先江戸市中を廿組程に  
分ち各組の中より地面持ち入り相集り入札の法にて誠實  
才能ある者二人を撰み是を組中の總代として奉行所より差  
出すべし左すれば奉行所より江戸中組より出る總代人  
凡そ四五十人も集まるべければ一大席を設けて集會せし  
む可し是れ即ち總代會議所なり次は會議の法すべて奉行



の存意よても總代人の中よりや出ゝる事よても又も市中の者よりや立ゝる事よても一應必ず奉行の手より總代會議は渡して其評議は懸け一紡承知の趣評決連印の上は非ざれも之を市中は施ゝ行ふへうらす且何事よならず會議よて可然と評決せも先例無き事よても之を行ふへー又然るへうらずと評決せもとへ舊來の仕來りと雖も直之之を廢止すべー是れ其要領あり猶總体の心得方を言へも抑此總代も江戸中より撰み出されゝる賢人ふれも即ち江戸中の智恵をいふり出ゝる者あるが故も銘ゝも篤と其理合を合點し假初も一己の私心を挾まず一圖は江戸中

一紡の爲を思ひ譬へど同船して風波の難は逢ひゝる時の如く相和し相助け何事をも取纏め成就せしむるを主とすべー且夫れ江戸中廣しと雖も細うは吟味すれも誰その地よ非るも無し又地面の主ゝる者已れど地面を大切と思ふもどるも無し今地面を大切と思ふ心を以て總代を撰み出し其總代打寄りて評議決着せも自然は江戸中を大切と思ふ心を生ずるゝ至るべー是れ實は總代會議の妙處ゝして殆筆舌よも盡し難き真味ありや今交易商會蒸氣用法製鐵局紙幣決其他總して江戸市中を富ますへき良法極めて多しと雖も先づ右江戸中を大切と思ふ心を一纏めふて後

は非れを手を付け難く故に我先つ會議法の大略を述べて  
以て其端を發すと云

追加本文總代は撰まる、者も人材を第一とて地面を  
持てぬ者もても苦くもまた勤役を凡四五年を限と  
して交代すべし且勤役中も相應の格式と俸金とを與  
ふ可し尤俸金を總地主中より之を出すべし猶論ずべ  
き事多く有りと雖も具録は暇あらす市中有志の諸賢  
尚其詳を問ふんと欲せむ板元よりよりて我家より來り  
訪ふべし

○  
佛蘭西在留の友人より書翰を得たり彼地見聞の事を記し  
且公子民部大輔殿のは旅館の圖をも寄贈す此冊紙數既に  
満されど近日刻して同好は頒とんとす

○  
西洋醫家必用の藥品ヂヤタリスヒヨスサルヒヤカミルレ  
マヨラン亞麻アルセムメリサの類追々傳來し當今に至り  
ても外船を待たずして其用之しうらず其他花草菜蔬等も  
次第に舶來多し吾去冬佛蘭西より歸帆の時も亦種々草木  
の種子根塊を携へ來り其内はサフランコルレクムアルタ

アゼーアユインリスフロレンティナラヘンデルカルロイ  
等あり此等次第は繁殖せむ後來一個の國益とも成るべし  
又革菓も方今を許多の菓を結ぶに至れり此物世間を流布  
するに至らば亦一種の物産を増補すと謂べし

革菓元和産あり西洋名アプル俗稱オホリンゴと云ふ林  
檣の屬よりて實大し且甜美あり

砂糖を只甘蔗サタウガより製するのみならず西洋よりては葛藟ササキの根  
よりも採り又楓の樹よりも之を採るいもゆる棒砂糖と云  
者も皆葛藟ササキより製する者あり

田中芳男 記

